

NEWSLETTER No.23

2016. 12. 5.

I DESK-Alumniプロジェクト

(2017年1月～)

▼プロジェクト概要

II ボン大学TLPドイツ語サマースクール

▼プログラム概要

▼参加記

III 欧州研究プログラム(ESP)

▼プログラム概要

▼奨学助成金 成果報告書

▼European Summer Academy: プログラムと参加記

IV ドイツ・ヨーロッパ研究修了証(ZDS-MA)

▼プログラム概要

▼奨学助成金 成果報告書

V 博士論文奨学助成金(ZSP)

▼プログラム概要

▼奨学助成金 成果報告書

VI 日独共同大学院プログラム(IGK)

▼2016年春季・共同セミナー: プログラム

I DESK-Alumniプロジェクト (2017年1月～)

プロジェクト概要

東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター(DESK)は、その前身のドイツ・ヨーロッパ研究室が設立された2000年以降、日欧の架け橋となる人材の育成と安定した日欧交流拠点の形成を責務として運営されてきました。

大学院学生の教育と研究支援の枠組みとしては、修士課程の「欧州研究プログラム(ESP)」と博士課程の「日独共同大学院プログラム(IGK)」をはじめ、様々な助成プログラムを整えてきました。また、2016年からはTLPドイツ語履修生を対象にボン大学TLPドイツ語サマースクールを開催するなど、ドイツ語の習得とドイツ研究の奨励にも注力してきました。

この度、DESKでは各種助成プログラムによる留学経験者、若手研究者、並びに社会人として活躍する同窓生の相互交流を促し、ネットワークを構築することでより強固な日欧交流拠点の形成に資することを目的とし、DESK-Alumni(同窓生)プロジェクトを開始いたしました。

具体的には、近年のDESK奨学助成金の受給者、各種プログラム修了生等、同窓生の全体メーリングリストを整備します。これにより、DESK主催のイベントや刊

行物等について、きめ細やかな情報発信を行っていきます。

ドイツ・ヨーロッパ研究センターは、1990年にドイツ政府が対外文化政策の一環として開始したドイツ研究の支援プログラムであり、現在では北米を中心にヨーロッパ、アジア、中東など世界各地にセンターが存在します。DESKは、これらセンター間との連携も積極的に試みています。本プロジェクトを通じ、DESK同窓生同士の交流にとどまることなく、世界各地のセンターとの幅広い交流と協力を可能とするネットワークを提供する所存です。

同窓生の皆様方におかれましては、今後も益々のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

なお、メーリングリストの整備にあたっては、個人情報(氏名及びメールアドレス)を収集し、管理いたします。個人情報は厳重に管理し、DESK関連情報のメール発信という目的の範囲内でのみ利用し、個人情報の漏洩の防止に努めます。また、個人情報を第三者に提供することはございません。個人情報の取り扱い等についてご質問、ご要望のある際は、

desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp までメールにてご連絡いただけますよう、お願い申し上げます。

DESK-Alumniプロジェクト対象のDESK助成プログラム各種(予定)

1. 大学院修士課程「欧州研究プログラム(ESP)」
2. ドイツ・ヨーロッパ研究修了証(ZDS-MA)
3. 大学院博士課程「日独共同大学院プログラム(IGK)」
4. 博士論文奨学助成金(ZSP)
5. 旧「ASKO-European Fall Academy(EFA)」、現「ASKO-European Summer Academy(ESA)」参加者
6. 「ボン大学TLPドイツ語サマースクールプログラム」参加者

※ 対象となるプログラムは、個人情報の収集状況等により、変更の可能性があります。

II

ボン大学TLPドイツ語サマースクールプログラム

2016年8月21日から9月4日にかけて、DAADドイツ学術交流会およびボン大学からの支援を受け、東京大学教養学部前期課程のTLPドイツ語履修学生を対象とした初の試みとして、「ボン大学TLPドイツ語サマースクール」が開催されました。

参加者はボンにおいて約2週間にわたってドイツ語集中コースを受講するとともに、ドイツを中心としたヨーロッパの文化・歴史・社会・政治に関するワークショップにも参加します。

往復の航空運賃(上限875ユーロ)とプログラム参加費・滞在費がDESKからの援助の対象となります。

2017年冬季および来年度以降も同様のプログラムを予定しております。最新の情報については、センターHPを随時ご確認ください。

プログラム参加記

教養学部理科一類 一年
宮田 莉良

1. ドイツ語授業について

研修が始まる前は、ドイツ語の授業についていけるか非常に心配でした。一列と二列の方の授業があまり進んでいなかったのを、文法の理解が浅いと自分で思っていたからです。

しかし、実際に授業が始まってみると、それは杞憂であったと分かりました。基本的には前セメスターの復習が中心で、講師の方の説明も丁寧で分かりやすかったからです。文法事項だけでなく、日常生活で使えるフレーズや、ドイツの一般的な慣習の事などを教えていただいた

ことが特に良かったです。

また、ずっと座学で授業をするだけでは無く、様々な企画を用意してくれていたのが良かったです。最終日のボン市内のクイズラリーは、このサマースクールで学んだドイツ語の知識などを生かした気がして楽しかったです。

2. その他のプログラムについて

自分自身理系である事もあって、ドイツの事について詳しくは無かったので、どのプログラムも新鮮でした。歴史博物館への訪問がプログラムの序盤にあったことで、その後のドイツとEUの政治についてのワークショップなどで前提としての知識が得られたと思います。

文系科目とされるものの中でも、政治や経済、歴史などの分野には興味があり無く、一方で文化などには興味があったのですが、博物館訪問やワークショップの中で、それらは社会の一連の流れとして切り離せるものではないのだという事を実感しました。齊藤先生に連れて行っていただいたボン市内の歴史案内では、高校では地理を選択していたためにほとんど学習していなかった世界史についても、しっかり学びなおしたいという気持ちが出てきました。

週末のドラッヘンフェルスへの遠足は、このボン滞在中に行ってみたいと思っていたので非常に良かったです。山頂から眺めたボン周辺の展望や、ドラッヘンブルク城など、様々な景色を見られたことが感慨深いです。麓の山岳鉄道の駅に古いポスターが貼ってあったのを見て、昔から変わらず国内外の観光客を集めていたのだらうと思いました。そのことにも納得が出来る、美しい景色でした。



授業のようす

3. 日常生活について

食事や買い物などの日常生活については、以前アメリカに居た事があるので、無意識のうちにアメリカでの暮らしと比較していた所があるような気がします。日本の生活と比べるよりはの方が違いが少ないように感じられましたが、それでもかなりの差異があったように思います。例えばチップ制度はどちらにもありますが、ドイツの方がチップが安く、頻度も低いと感じました。

食生活に関しては、非常に満足でした。予期していた通りジャガイモはフライなどの形でよく見ましたが、一つ意外だったのは、それほどソーセージを見なかった事です。軽食としてカレーヴルストを食べることはあるのですが、朝食などで食べるのはもっぱらハムでした。確かにスーパーなどに行くと種々のソーセージが売られているのが分かるのですが、この二週間の滞在中に食べたのは数えるほどの回数しかありませんでした。

他に印象深かった点としては、鉄道についての部分があります。Uーバーンにせよ、その他の高速鉄道にせよ、びっくりしたのは改札が無いことです。街中ではどこからが駅で、どこから外なのか分からない駅もあり、その辺りは日本とはかなり違うと思いました。時間通りには来

ないという話も聞いていましたが、その点は思ったよりは遅れていなかった気がします。ただ急停止や急発車など、運転は少し雑に感じました。色々な部分で大きな差異がありましたが、日本の鉄道は相当丁寧に運行されているという事は実感できました。

4. 研修の良かったところ

ここまでに書きましたが、研修前に想定していたのとは違って、ドイツ語以外の部分で学ぶところが大きかったのが非常に良かったです。普段触れることが少ない分野について考えたり、ドイツの学生と交流が出来たり、新しい体験が沢山出来ました。また、いつもは一緒に授業を受けてはいないもう一方のTLPクラスの生徒や、同じクラスでもあまり話をしていなかった生徒とも親交を深めたりできたことも、長期研修ならではのことで良かったです。普段は同じ科類の人とばかり交流をしがちなので、別の科類の人と話すことは、学問的な話という面でも刺激的でした。

5. 研修の改善すべき点

少し長丁場だったので、スケジュールは詰めすぎないほうがいいのかとは思いま

す。とはいえ、折角来たのだからと言って自由時間には自主的に出かけてしまったりするので、それほど効果は無いと思いますが、今回より多く予定を入れると二週間は厳しいかもしれません。

また、食事はしょっぱいものが多いので、ドリンクはチケット制ではなくドリンクバー形式の方がいいように感じました。足りなかったわけではありませんが、もう少し余裕が欲しかったです。

6. 感想

研修全体を通して、自分の将来について考えていました。いつもは触れない学問について学んだり、別の科類の人と話し合ったり、そしてもちろんドイツ語や英語と向き合ったりして、今のままの進学先の希望で良いのか、その学問を専攻することにして良いのか、などという事を考えていました。

思わぬところに自分の興味が向いていたことが分かったり、自分の英語力の不足を知ったり、様々な考える中で、もちろん結論はすぐに出るものではありませんでしたが、一度自分を見つめなおすきっかけになった気がしま

す。進学選択まではまだ時間がありますし、悠長なことを言っていられるわけではありませんが、今すぐに全てを決めなくてもこれからじっくり、できるだけ色々なものに触れながら将来の事を考えていきたいと思いました。

また、研修を終えてからは何よりも、もっとドイツの事を知りたいとも思いました。まだまだドイツ語はほとんど読めず、国自体についても知識と理解が浅く、以前からもっと調べておけば良かったとも感じました。いつかまた、ドイツに行く機会が出来た時の為に、そうでなくとも深くドイツの事を知るために、次のセメスターからもドイツ語の学習に励みたいと思っています。



ドイツ人学生とのワークショップ

プログラム参加記

教養学部理科二類 一年
小島 佑介

今回の研修における最大の目的はドイツ語能力の向上であったので、午前中のドイツ語の授業はとても楽しみにしていたが、それと同時にドイツ語で受けるドイツ語の授業というものに若干の不安も抱いていた。それでもいざ

始まってみると、先生がなるべく簡単なドイツ語で話してくれたこともあってか、それなりにドイツ語を聞き取ることができ、多少はリスニング能力も向上したように思う。授業の内容は期待以上のもので、まだ文法としては習っていないものの日常的に使われる表現をいろいろ学ぶことができたほか、授業中に先生が身のまわりのもので目ぼしいものを見つけては、それに対応するドイツ語単語を教えてくれたり、逆に学生側からこれはドイツ語ではなんというのかと尋ねたりすることで、より実用的なドイツ語を身に着けることができたように思う。さらに、実際にドイツのスーパーマーケットに

行ってみるというような授業も、日本ではできないような体験で、とても貴重なものであった。また、一つ印象的だったのが“guck”という単語で、辞書で調べると「グック」という発音になっているにもかかわらず、実際の発音は「クック」であることを授業で教わり、実際に街中で子供が母親に“Guck mal!” “クックマル”と叫んでいるのをしばしば耳にした。これもまた、日本で辞書を眺めているだけではできない経験であり、ドイツに来てよかったと感じた瞬間であった。今回のドイツ語の授業はより進んだ内容というよりは前学期の復習を兼ねたものであり、ドイツ語の能力に特段の向上

が見られたかといわれるとまだまだ自分でも納得のいかない部分が多かったのも確かだが、おそらく今後のドイツ語学習には多大な影響があるのではないかと思う。

午後のプログラムは午前中とは打って変わって英語を聞いたり話したりする機会が多かった。これは前学期でも実感していたことだが、これまで英語を実際に使用する機会が少なかったために、リスニング能力とスピーキング能力が私自身あまり高くない。特に、専門的な話になると、単語力不足も相まって、数分のうちに話についていけなくなり、そのうち集中力も途切れてしまう。今回の研修でもこれは同じで、ヨーロッパの政治に関する講演など、とても興味深い話が多かったにもかかわらず、理解が追い付かないことが多々あったのはとても残念であった。しかしそれでも、ドイツの学生達との交流はとても有意義なものになったように思う。前半のディスカッションでは、社会関係や文化の違いなどについて英語による議論をし、またそのあと、夕食時にはドイツの学生とテーブルを囲って様々なことを話した。特に夕食時の会話はとても楽しく、英会話能力の向上につながったのみならず、ドイツと日本の文化的な違いについて知ることができ、とても充実した時間となった。ドイツ語の研修という本来の目的からは、少し逸れてしまっているようにも思えるが、今回の研修ではドイツ語の能力よりも英語の能力の向上のほうが実感できた。

博物館やドイチェ・ヴェレの訪問、そして週末のエクスカーションもまた有意義なものであった。中でも、ドイツ連邦共和国歴史館はリアルな展示を間近で体験することで高校時代に習った戦後ドイツの歴史をより詳しく知ることができ、また戦後、ドイツ人がどのように感じ、どのように考えて生きてきたかという文化的内面にわずかながら触れることができたように思う。

日常生活を送るうえで痛感したのが、いかにドイツ語を聞き取れないかということであった。確かに簡単にゆっくり話されるドイツ語ならば聞き取れるようにはなっ

ていたが、実際のドイツ語は予想以上に早く、先生方の会話などは、もはや単語すら聞き取れないほどで、哑然としたのをよく覚えている。店で店員との会話も困ったことの一つで、初めはあいさつすら返すことができなかった。この点は、今後一番力を入れて学習しなければならないように思う。また、日本との文化の違いは驚くべきものばかりであった。電車のドアはボタンを押さなければ開かず、駅の電光掲示板には絶えず遅延情報が流れていた。人々はとても気さくで、街中でもおそらく知り合いでないだろう人々が談笑していたり、店員と客が注文を取り終えた後もだいたい長話をしたりする場面を何度も見かけた。そんな中でも一番の驚きだったのが食事の量である。かつて聞いた話では、「朝食は皇帝のように、昼食は国王のように、夕食は乞食のように」とのことであったが、出てくる食事に乞食のような食事はなく、むしろ毎食かなりのボリュームがあった。レストランで頼んでも屋台で頼んでも予想以上の量が出てくるあたり、ドイツ人の胃袋は計り知れないと思った。

本研修を終えてよかったと感じるのは、やはり日本ではできない数々の体験ができたことであろう。それは語学の面にとどまらず、その他の学問でも普段とは異なる視点から物事が見られたほか、文化、実生活の面でも貴重な体験ができたと感じている。また、今回の研修は、普段かかわりのないもう一方のドイツ語TLPのクラスとの良い交流の場にもなったように思う。彼らと話すことで、英語、ドイツ語学習の良い刺激になったし、普段話すことのない科類の学生との会話はとても楽しいものであった。

反対に改善すべきと感じたのは、事前の準備不足である。特に先程も述べたとおりリスニング能力の不足は顕著で、ドイツ語で会話する際も、話すことはできても相手の言っていることが理解できないことが多く、せっかくのドイツ語を話す機会を損じたようで残念であった。事前にある程度、授業内で、もしくは学生が自主的にリスニング能力を鍛えておくべきだったように思う。他に改善すべき点は、午後のワークショップの内容であ

る。今回はヨーロッパやドイツの政治など文系の内容の話が多く、理系分野の講演がなかったのは残念であった。また、ワークショップの内容に即した基礎知識を事前に知ることができればよりその講演を自身に生かすことができたのではないかと思う。

今回のサマースクールの様々な場面で感じたのは、我々の積極性の欠如である。例えば、ガイド中やワークショップの講演後に質問の有無を尋ねられても、なかなか質問をする人がいなかったり、ディスカッションでもなかなか日本の学生が発言できないでいたりということが多かった。私はそれが日本人特有の雰囲気なのだろうかなどと考えていたが、サマースクールも終わりを迎えたころ、こんな話を聞いた。今こそドイツの学生たちは積極的に発言し、質問するものの、かつてのドイツ人はこうではなかった。ある時から、学生に積極性を持たせるような教育が始まり、その結果として、今のドイツの学生の積極的な姿勢があるのだという。この話を聞いて、私はディスカッションなどにおける積極性は決してその国特有の雰囲気などではなく、後から身につけられるものであるということを知った。ますますグローバル化が進むこの時代に、非積極的であると言われがちな日本の学生が積極性を身に着けることは重要であり、今回のような海外での経験は学生たちが積極性を身に着ける第一歩になるのではないかと感じた。



参加者の集合写真

Ⅲ

欧州研究プログラム(ESP)

奨学助成金成果報告書

地域文化研究専攻
修士課程(ESP所属)
稲垣 健太郎

申請者はDESKの奨学助成金を受けて、3月1日から3月22日までドイツのハイドルベルク、ハレ、ライプニッツ及びベルリンにおいて史料調査を実施した。本調査報告書では、上述の滞在期間において得られた知見を、1. 史料調査の成果、2. 研究発表の成果、3. 研究ネットワークの構築の三点からまとめた。

1. 史料調査の成果

本研究は、初期近世における主権論を構成する要素のひとつとしてヘブライズムの伝統を仮説的に指定し、当時の法学者及び神学者のテキストの読解・比較を通じて、同仮説を検証するものである。従来の思想史は17世紀を「世俗化」の時代として叙述してきた。しかしながら初期近世のネーデルラント連邦共和国において活躍した論者たち、たとえばフーゴー・グロティウス(Hugo Grotius, 1583-1645)やペトルス・クナエウス(Petrus Cunaeus, 1586-1638)、ベネディクトゥス・ドゥ・スピノザ(Benedictus / Baruch de Spinoza, 1632-1677)らのテキストを一瞥すると、彼らが聖書章句、就中、旧約聖書章句の引用と解釈を多層的に積み重ね、独自の「政治神学」を構築していることに気付く。こうした知的潮流において、旧約聖書中の「ヘブライ人の国制(Respublica Hebraeorum)」を理想的政体と看做す一種の著作ジャンルが形成されてきた。上述の論者たちも、程度の差こそあれ、この著作ジャンルの形成に寄与してきたと言える。

本研究の出发点として、申請者はまずフーゴー・グロティウスの政治思想を取り上げる。法学者、政治思想家としてのみならず、聖書注解者、神学者としても活

躍したグロティウスは、政治思想と聖書解釈という二項を媒介する思考についてのケーススタディとして適当であると考えられるからである。本研究の一部として執筆される修士論文では、グロティウスの思想を1619年以前と以後とで区分し、彼がオランダで活躍した時期に当たる前期の著作を中心に分析を行う。

今次調査では、(a)グロティウスに関する欧語文献(b)17世紀におけるヘブライ語学の発展に関する欧語文献(c)16世紀後半のカルヴァン派政治思想に関する欧語文献の収集を主に実施した。

(a)の項目において収集した資料のうち、本研究との関連で特にレヴァントであるのは、Giovanni SilvanoのRepubblicanesimo e repubblicanesimi all'inizio dell'età moderna. La rivolta delle Provincie Unite e il "De Republica Emendanda" di Ugo Grozioである。本論文は、グロティウスの最初期の著作と目される『共和国改善論(De Republica Emendanda)』(ca. 1600)を、共和主義思想の文脈に位置付けて分析を試みたものである。とりわけ、旧約聖書中の「ヘブライ人の国制」に関する章句への参照を論点の中心に据えている点で、申請者の問題関心と近い論考である。また、Henk J. M. NellenとJohannes Trapmanによって編まれたDe Hollandse Jaren van Hugo de Groot (1583-1621)は、修士論文の対象にもなる初期グロティウス(1600-1619年)の知的形成を、政治思想、神学、文献学の見地から論じたものである。その意味で、修士論文を執筆するために不可欠の先行研究を獲得することができたと言える。

本研究はさし当り、17世紀のネーデルラントにおいて認められる「ヘブライ人の国制」を理想的な政体と看做す潮流を、具体的な思想テキストにおける聖書章句の引用・解釈の相互比較を通じて分析するものである。「ヘブライ人の国制」乃至は旧約聖書を政治的に援用する潮流は、16世紀後半以来のヘブライ学の隆盛と密接に関連している。相互に矛盾する旧約の諸章句を整合的に解釈するために当時の論者はヘブライ語によるラビ

欧州研究プログラム(European Studies Program)は、EUを中心とした統合が進み、政治・経済・社会のあらゆる方面で既存の秩序が変容しつつある現代欧州について、最新の研究方法と正確な知識、それに基づく洞察力を養い、日欧の架け橋として社会の様々な方面で活躍する「市民的エリート」を養成するプログラムです。

運営組織: 東京大学駒場キャンパスの大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構ドイツ・ヨーロッパ研究センターが、駒場キャンパスにある豊富な研究と教育のための人材を中心として、本郷キャンパスの教員の支援もおおぎながら、この教育プログラムの調整にあたります。

参加学生: ESPの学生は、東京大学大学院総合文化研究科の文系4専攻(言語情報科学専攻、超域文化科学専攻、地域文化研究専攻、国際社会科学専攻)のいずれかに所属しつつ、そこを足場として「欧州研究」という課題に取り組むことになります。

学修の特色: ESPに所属する学生は、帰属する専攻の科目に加え、プログラムの必修科目と選択必修科目を履修することによって、幅広い現代欧州研究の基礎をしっかりと身につけます。また展開科目や専攻提供科目、法学政治学研究科や経済学研究科などの他研究科科目を履修することによって、応用的な知識とより深い洞察力を獲得します。

学位: 必要単位を取得し、修士論文審査に合格した修了者には、「修士(欧州研究)」という学位が授与されます。

奨学助成金: ESPに参加している学生は、ドイツで修士論文作成のために現地調査旅行を行なうための奨学助成金制度があります。

の著作群を参照していた。こうした傾向は、本研究で機軸とする17世紀前半のオランダの論者にも認められるため、特に1580年～1620年のオランダにおけるヘブライ語学の隆盛を歴史的に再構築する必要がある。

今次調査では、16世紀前半以降のヘブライ学の「発明」に関する欧語文献を収集した。第一にAllison P. CoudertとJeffrey S. Shoulsonによって編まれたHebraica veritas? Christian Hebraists and the Study of Judaism in Early Modern Europeを挙げることができる。中世盛期におけるヘブライ学の萌芽に関して論じた本書は、本研究が対象とする時代のヘブライ学の隆盛を論じる上で、重要な前提知識を提供するものであろう。また、Frank E. ManuelのThe Broken Staffは、「ルネサンス」においてローマ・ギリシアの古典に並んでヘブライ語に関する研究が進展していたことを実証し、ヘブライ語学が16・17世紀の神学者・文献学者にどのように受容されたのかを、具体的なテキスト分析に依拠しつつ論じている。

さらに、個別のヘブライ学者を論じたモノグラフィーとして、Stephen G. BurnettのFrom Christian Hebraism to Jewish Studies: Johannes Buxtorf (1564-1629) and Hebrew Learning in the Seventeenth CenturyやPeter T. van RoodenのTheology, biblical scholarship, and rabbinical studies in the seventeenth century: Constantijn L'Empereur (1591-1648), professor of Hebrew and theology at Leidenを閲覧・収集した。以上のモノグラフィーは、17世紀前半のヘブライ学者、特にグロティウスやクナエウスに大きな影響を与えたフランシス・ユニウス(Fransiscus Junius, 1545-1602)の著作の分析を行う本研究にとり、その方法という意味において重要な先行研究であると言える。

16世紀後半のカルヴァン派の政治思想は、モナルコマキの「抵抗権」や人民主権論という理論の帰結ともいえるべき要素が強調されてきた。反面、理論を導出する手続きについては十分な検討がなされていないようにも思われる。本研究の出発点は、16世紀後半のカルヴァン派の政治思想において、旧約聖書章句の解釈を通じて抵抗権や人民主権論が構築されてきた、というものである。本研究はさらに、16世紀後半のカルヴァ

ン派政治思想においても「ヘブライ人の国制」を理想的な政体と看做す傾向が存在し、それがグロティウスら17世紀前半の論者に影響を及ぼしたのではないかと、という仮説に立つ。申請者は、「生の改革」という宗教改革理念の下、カルヴァン派が教会規則や生活様式、世俗と聖の関係を旧約聖書の章句に従って形成した事実を「ヘブライ人の国制」への参照と関連付け、この仮説を検証することを目指している。

以上の仮説にとり重要な文献として、Christoph StrohmのCalvinismus und Rechtを収集した。また、3月4日にStrohm教授と面談した際に(3. 研究ネットワークの構築を参照)、カルヴァン派正統主義に属する人物として、ヨハネス・アルトウジウス(Johannes Althusius, 1563-1638)やテオドール・ド・ベーズ(Théodore de Bèze, 1519-1609)に関する文献を得ることができた。

2. 研究発表の成果

申請者は、3月9日から13日にかけて、ハレ大学で開催された「日独共同大学院プログラム」2015年度春季共同セミナーに参加した。申請者は同セミナーにおいて、“Die »Respublica Hebraeorum« bei Hugo Grotius: ein anderer Ursprung seiner staatskirchenrechtlichen Theorie”と題する研究発表を行った。

同発表においては、グロティウスの初期の著作であるDe Republica Emendandaにつき、同書で展開される国制論に注目することで、彼が旧約聖書中の「ヘブライ人の国制」を如何に理解していたのか、という問いに答えることを目指した。結果として、旧約聖書中の「ヘブライ人の国制」が、政治思想と聖書解釈という一見すると関連の見えづらい二項を接合するトポスとして機能していたことの一端を素描することができた。

さらに、本発表に対して寄せられた質問は、申請者の今後の研究にとって極めて示唆に富むものであった。第一に、グロティウスが聖書をどのように読んだのか、という質問は、本研究の根幹にも関わるものである。この問題は同時に、グロティウスら17世紀の論者がどの程度まで世俗的 / 敬虔であったのか、という問題にもつながるであろう。

また、研究の方法に関しては、Pocockらの方法論を参考にできるのではない

か、というアドバイスを得ることができた。この助言に基づき、申請者は政治思想史の方法論に関する文献の講読にあたっている。

3. 研究ネットワークの構築

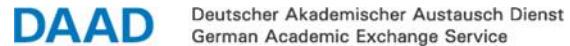
申請者は、3月2日から8日にかけて、ハイデルベルクに滞在し、ハイデルベルク大学神学部図書館及びハイデルベルク大学図書館において史料調査を実施した(1. 史料調査の成果を参照)。また3月4日に、カルヴァン派の法学者に関する研究で著名なハイデルベルク大学神学部Strohm教授と面談し、研究とハイデルベルクでの博士課程遂行につき、具体的なアドバイスを得ることができた。その意味で、今回のドイツ滞在を通じて貴重な研究ネットワークの構築に成功したと言える。

European Summer Academy (ESA) 2016

ドイツ・ヨーロッパ研究センターでは、2007年より、毎年秋に、ASKOヨーロッパ財団、オツエンハウゼン欧州アカデミー(EAO)、トリア大学と協力して約2週間のEuropean Fall Academy(EFA)を開催してきました。2015年以降は開催時期を夏に移し、名称もEuropean Summer Academy(ESA)に変更しました。また、これまでの主な参加対象は東京大学大学院総合文化研究科の修士課程および学部後期課程でしたが、2015年以降、教養学部前期課程の学生も対象に加えました。さらに2015年より韓国・ソウル市の梨花女子大学と共同で開催され、同時期にセミナーを行う北京大学ドイツ研究センター(ZDS)とソウル中央大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター(ZeDES)の参加者とも交流を深めています。

セミナーでは、ドイツ・ザールラント州にある欧州アカデミー(EAO)で、ヨーロッパ各国のEU研究者による講義を受講し、ブリュッセル、ルクセンブルクなどにある欧州議会、欧州委員会などの諸機関やドイツ学術交流会(DAAD)本部訪問等が行われます。使用言語は英語です。

欧州研究プログラム(ESP)をはじめとする修士課程の学生、教養学部前期課程ならびに後期課程の学生から公募で選ばれた参加者に対して、渡航費の一部およびセミナー参加費が助成されます。



In cooperation with



Regional Integration and Cooperation – The EU and East Asia in 2016

EUROPEAN SUMMER ACADEMY 2016

Tuesday, 2 August 2016

Arrival in Frankfurt and transfer to Otzenhausen

Wednesday, 3 August 2016

- Welcome address

Klaus-Peter Beck, President of the ASKO- EUROPA STIFTUNG
Sebastian Zeitmann, LL.M., EAO / Saarland University

- Lecture and discussion: Why European Integration? Motives, interests and major steps towards European integration
Dr. Elisabeth Schmitt, EAO

- Lecture and workshop: Backbone of European Integration - Fundamental Freedoms of the European Union
Eleftherios Petropoulos, LL.M., Europa

-Institut of Saarland University

Thursday, 4 August 2016

- Lecture: That strange Thing European Union: Institutions and Decision-Making

Dipl.-Jur. Sebastian Zeitmann LL.M., EAO / Saarland University

- DESK: Presentation on the DAAD

Christian Strowa, DAAD, Bonn

- Workshop/Simulation: That strange Thing European Union: Institutions and Decision-Making
Dipl.-Jur. Sebastian Zeitmann LL.M., EAO / Saarland University

Friday, 5 August 2016

EXCURSION TO STRASBOURG (FRANCE)

- Visit to the Council of Europe and the European Youth Centre Strasbourg

Saturday, 6 August 2016

HALF-DAY EXCURSION: SAARBRÜCKEN (GERMANY)

- Presentation and discussion: May the EU Model serve as an Example for Future Regional Cooperation in South-East Asia?
Dr. phil. Stefan Niederhäfner, Dipl. Pol., Paris

- Guided walk: Saarbrücken, a City between Germany, France and a Distinct History

Sunday, 7 August 2016

- Lecture and discussion: The political and economic Relations between the EU and Asia at the

Beginning of the 21st century

Dr. Wolfgang Pape, Brussels

- Workshop: The EU and its Relations to Japan and Korea

Dr. Wolfgang Pape, Brussels

Monday, 8 August 2016**EXCURSION: LUXEMBOURG CITY AND TRIER****- Visit to the European Stability Mechanism****- Guided tour: From the Romans via Karl Marx till today: Trier – the oldest City in Germany****Tuesday, 9 August 2016****- Lecture and workshop: Sustainable Development as a common Challenge for Europe and Asia**

Dr. Hannes Petrischak, Foundation Forum für Verantwortung, Saarbrücken

- Thousands of Years of History: Hike to the Celtic Circular Wall

Kerstin Adam, Foundation Stiftung Europäische Kultur und Bildung, Saarbrücken

Wednesday, 10 August 2016**- Lecture: External Policy of the European Union**

Prof. Dr. Mathias Jopp, Institute for European Politics, Berlin

- Lecture: Protecting Human Rights in Europe – a Multilevel System benefiting the Citizen (and how the EU Tries to Export it)

Prof. Dr. Iris Canor, COLMAN, Tel Aviv, Israel

Israel

Thursday, 11 August 2016**HALF-DAY EXCURSION: SCHENGEN (LUXEMBOURG) AND METZ (FRANCE)****- Lecture: Populism and Nationalism on the Rise? The EU in 2016**

Prof. Dr. Joachim Schild, University of Trier

- One of the Milestones of EU Integration: The Schengen Area of Borderless Travel**Friday, 12 August 2016****- Evaluation and awarding of certificates****ESA成果報告書**地域文化研究専攻
修士課程（ESP所属）
福原優策

本レポートは、2016年8月2日から8月12日までドイツのオツツェンハウゼンで行われた、大学院修士課程ESPプログラムの一環の授業でもある「欧州研究実習1」に関する報告レポートである。本レポートでは、参加者間での議論や交流、授業やワークショップ、諸EU機関の訪問、そして、ドイツ、フランス、ルクセンブルクの街の訪問という4つの観点から本プログラムについての報告を行いたい。

本プログラムの参加者は東京大学と韓国のイファ女子大学校からの学部生および修士課程の大学院生であったが、参加者は日本人と韓国人に限らず、中国、アメリカ、ラトヴィア、タンザニア出身者が含まれ、また、その多くが豊富な海外経験を有していた。その影響もあり、授業やワークショップ、諸機関訪問の際には、非常に多様な観点や価値観に基づき議論を行うことができた。これは、本プログラムの内容をより多角的に検討、理解する大きな助けとなった。また、授業の講師の方々もドイツ人の講師がほとんどで

あったにもかかわらず、その経験を見てみるとイスラエルやフランス、韓国、日本での研究機関での勤務経験がある方々含まれており、EUについてより広い観点から議論を行うことを可能にしていたように思える。

また、講義内容に関係なく、ほとんどの講師は非常に話し方がうまく、説得力のある説明の仕方をしており、議論の構成の仕方や説明に使用する例、鋭い質問に対しての解答の仕方などにおいても非常に参考となる例が多かった。この点は、日本とは大きく異なる点の一つであり、欧米的文化の素地のない日本人が、そのような発表方法をそのまま真似ることではないにしても、参考にする価値は十分にある体験であった。特に、外国人に対して、外国語で専門的な説明を行う際に、どのように話を構成し進めていくのかについて貴重な具体例を直接体験することができた。

本セミナーの授業については、レクチャー、ワークショップ、ディスカッションの3つに分かれており、その分野はいずれもEU研究に関連しているが、それぞれを詳しく見てみるとEU法や欧州人権法、EU発展の歴史、外交政策、さらには東アジアにおけるEUモデルの適用の可能性と限界、環境政策など非常に包括的な構成となっていた。内容的には、ほとんどの授業が非常に基本的な説明で終わっていたが、それにもかかわらず、英語での表現やプレゼンテーションでの立ち振る舞い、議論の構成の仕方など、専門的な

内容以外の側面でも学ぶことができた部分が多くあった。ワークショップでは、実際にEU諸機関で行われている交渉を実際に行うというものが含まれており、例えば、EU内でも法案の採択の手続きやEUと中国とのFTA交渉を行った。このワークショップでは、実際には知識として知っていた事柄を実際の交渉として擬似的に体験することで、いかにそのプロセスが複雑で時間のかかる交渉であるかだけでなく、交渉相手と自国の状況、さらには世界情勢なども包括的かつ専門的に知っていなければならないということも体験することができた。このような交渉の複雑さを理解することがこのワークショップの目的であったわけであるが、EUの組織の構造を知るよいきっかけとも、改めてその複雑さを確認する復習の機会ともなった演習であった。

また、環境問題へのEUの取り組みについてのワークショップでは、環境問題が世界的な問題であるだけに、各国の状況も異なるなかでいかにヨーロッパ（ドイツ）の理念を広めていくかということの難しさが明確に浮き彫りにされた議論でもあった。特に、アフリカの発展途上国とヨーロッパのなかでも先進国のドイツといった環境への対策において大きな開きがあるような国の出身者の議論では、それぞれ環境問題に対する理解が異なっており、双方が納得出来るコンセンサスを世界的な枠組みで形成することがいかに難しいかを体験することができるとともに、政治のプロセスにおいて人間が理解し合うこ

との難しさを感じた瞬間でもあった。

Brexitに関する授業では、BrexitがEUに与える影響やその実現可能性についての議論がなされたが、この問題が非常に衝撃的な出来事であると同時に、時事的な話題でもあるので、参加者の関心がとりわけ高かったとおもわれる。どの識者もBrexitが実際に起こる可能性は、EU離脱におけるイギリスの経済的負担が大きすぎるという点や、イギリスが脱退によって得られる利益がほとんどない、世代間のギャップとその交代による世論の変化という理由から懐疑的に考えていた。私個人の関心としては、この動きがウクライナ危機以降深刻化しているロシアとの関係にどのような影響を及ぼすのか、この事件がヨーロッパの一体性を揺るがすのか、それとも長期的に見て結束力を固める方向へと働くのか、という問題にあったが、それについてこのタイミングでドイツ人の意見を聞くことができたことは非常に貴重であった。

EUの外交政策についてのレクチャーとディスカッションでは、EUの外交政策について、非常に多岐にわたるテーマと地域を扱っており、EUが世界中の地域とどのような政策で協力しており、どのような関係を築いているのかを包括的かつ導人的な説明とともに理解することができた。とくに、ロシアとウクライナ問題、トルコと難民問題といったここ数年の間に生じている大きな政治的・社会的問題について専門家の考察を伺うことができたのは個人的に有意義であった。

EU諸機関への訪問プログラムについては、ストラスブールの欧州評議会とその青少年支援活動、ルクセンブルクのESMへの訪問が中心的なプログラムであった。欧州評議会では、一般的にEU諸機関と混合されてしまうこともあるが、欧州人権条約の締結や履行状況の監視といった重要な役割を担っており、その加盟国も47カ国とEU加盟国よりも一回りも多くなっている。加盟国がEUの基本的価値観や理念を遵守しているかを厳しく審査、確認する役割を担ってきた重要な機関である。また、その下部組織である青少年パートナーシップは、世界各国の青少年を対象にEUの構造や人権の理念などを教えることを目的としており、その対象は、日本や中国、アメリカといったEU外の国やドイツやフランス、イタリアといった人権やEUの理念が守られている初期メ

ンバーの国々のみではない。他にも、ウクライナとロシア、グルジアとロシア、旧ユーゴスラビア諸国といった民族間の紛争や争いが比較的近年に激化した歴史を持つ地域の青少年への教育と相互理解を通して、各国の政策とは別の形でアプローチをおこなっている。この機関での説明を受け、市民への幼少期からの教



European Stability Mechanism訪問

育がEUへの信頼やEUの理念への理解をより強固なものにするために重要な役割を果たすことを改めて確認することができた。

ルクセンブルクのEuropean Stability Mechanism(ESM)の訪問では、リーマンショックとそれに続くユーロ危機、ギリシャ問題といった統一通貨ユーロの安定性が大きく揺らぐきっかけとなった出来事を通して、いかにEUが金融危機の際にユーロの安定性を安定化させるメカニズムを形成したかを詳細な説明とともに理解することができた。現在のギリシャへのEUからの財政支援や財政債権計画もESMと合わせてみるとその構造がより深く理解することができる。各国の国際購入を通し各国財政に資金を注入し、数十年単位で返済を計画しているが、そもそも各国の社会・経済状況は地域により大きく異なるし、ギリシャのような小国で、工業や情報産業が発達していない国が、計画通りに産業構造を変え、財政赤字を回復させ、債務を計画通り返済することができるのか。また、次の金融危機の波がヨーロッパを襲う時に、ESMがどの程度その影響を和らげることができるか。今後も注視していく必要がある。

ルクセンブルクの小さな村であるシェンゲンへの訪問は、シェンゲン協定の歴史と理念を現地で振り返る貴重な経験となった。例えば、日本人である私がシェンゲン協定加盟国であるドイツとフランスと

ルクセンブルクをビザの手続きやパスポート審査を無しに自由に入出りできることは、現在のヨーロッパを旅行したことのある者なら当然のことのように思われるが、それが可能となっているのもシェンゲン協定が結ばれたおかげである。プログラムの一環で学生たちが記念の鍵をつくり、その鍵を川に投げるということを行ったが、現地のガイドの方がシェンゲン協定や欧州統合になぞらえて、協定が結ばれたらどの国も離脱することがない(おそらく希望とこれまでの現実を合わせている)こと掛けていと言及していた。これは、ヨーロッパにおける人の自由移動が、経済生活や人の日常生活の一部として完全に定着している現実とそれに逆行してシェンゲン協定を制限・離脱することで得られる利益が損失に比べて小さすぎることから感覚的にも納得することができ。最近のシリアからの難民の増加や各国でのテロリズムの増加などにより、国境間での取り締まりや審査を強化する動きが一部の国で見られているが、これが今後どの程度まで制限されるのか、どの程度各国の政治的利益に影響されるのか、今後も目を離せないが、その原点をシェンゲンで感じることができた。

本プログラムでいくつかの街を訪れ、それぞれの街を観察する機会を設けていただいた。フランスのストラスブールとメッツ、ドイツのザールブリュッケンとトリア、ルクセンブルクの旧市街と計5つの国を短期探索することができた。ルクセンブルクでは、EU司法裁判所をはじめとしていくつものEU機関が設置されており、ドイツとフランスからも近いと、普段の日中は各国から勤務者で溢れているという話を伺ったが、それ自体がEUの4つの資本の自由移動を体現しており、授業で学んだことを人々の実生活のあり方を通して再確認することができる貴重な体験であった。トリアでは、現地の人々と話す機会があったが、そこでは、難民差別や民族的差別について非難する言説が主に聞かれた。一方で、短期間に大量の難民が押し寄せてくることによる、文化的同一性の破壊の懸念を表している人もいた。その後の講義で、ドイツにおける難民の入口の役割を果たしている街でもあり、難民の影響を非常に大きく受けているということがわかった。最近の世論調査では、メルケルの支持率が低下してきてお

り、その原因としてメルケル政権の難民政策への不満があげられている。このまま、難民を受け入れつづけることにどの程度国民が納得できるのか。EU各国では、移民の受け入れについて排外的政策を掲げ、それをEU懐疑主義やナショナリズムと結びつける政党が現れてきている。このような今後のEUの大きな問題に関しても、授業だけでなく、実際に現地で見ることができたという意味でも、本プロ

グラムの各街の訪問は大きな意味があったといえる。

以上で述べたように、本プログラムで得た知見は今後、ヨーロッパに関係する地域を研究する者にとって非常に役立つであろうものばかりであった。EU研究にかんする基本的な理解を再確認するとともに、現地での貴重な経験を通して、体験的にも理解を促進することができたことは本プログラムでしかなし得なかったであろ

う。最後になるが、本プログラムの運営に携わっていただいた先生方、諸機関に感謝の意を示したい。

ESA成果報告書

地域文化研究専攻
修士課程（ESP所属）
高井綾香

2016年8月2日～12日にかけて、ドイツのEuropäische Akademie Otzenhausenにおいて開催されたEuropean Sommer Academy（以下、ESAと省略）の成果と課題について報告する。今年のテーマは「Regional Integration and Cooperation – The EU and East Asia in 2016」であった。講義やワークショップに加え、フランス、ドイツ、ルクセンブルクへの遠足にも参加し大変充実した時間を過ごすことができた。講義、遠足、自身の感想と反省および今後の展望の4点から報告していきたい。

講義、ワークショップ

11日間で9人の講師による講義、ワークショップが開催された。内容は、EUの概要や各機関について、EU法や決定手続きに関するものなど基本的な内容から持続可能な発展、人権問題など様々であった。特に面白いと感じたのはEUとアジアとの比較およびEUとの関係を考える内容の講義であった。東南アジアでも統合が起こりうるか、EUをモデルとしてASEANについて検討した“May the EU Model serve as an Example for Future Regional Cooperation in South East Asia?”の講義では、まず協力（cooperation）と統合（integration）の概念の違いの説明があり、それからASEANについてその概要、組織、決定手続きなどをEUと比較しながら

紹介してくださった。ワークショップでは、5つのテーマに分かれASEANの将来を考え発表した。ASEANの特徴は、決定手続きにおいて超国家的な存在が機能していないことにある。これを踏まえ、私のチームは経済面で、世界及びアジアでの貿易の今後をASEAN内の結びつき、超国家組織の誕生の可能性などに関連して検討した。これまでアジアに暮らしていながらもASEANについてほとんど知らなかったのだということを、他のメンバーとともに実感した。本プログラムの参加者が全員アジア出身またはアジアに留学している学生ということもあり、EUを勉強するプログラムではあるが自分たちの住む地域についても考えることができたのではないと思う。EUとアジアの関係という観点で具体的なイメージを持って考えることができ、一方で自分たちの暮らすアジアの事は実はあまりよく知らなかったのだということを感じさせられたように感じる。

また、いくつかの講義で教科書には載っていない、最新のEUの動向についても知ることが出来たことは注目に値するだろう。“Populism and Euroscepticism on the Rise? The EU in 2016”では、近年台頭してきているユーロ懐疑派やポピュリズムに関しての研究や各国の動向を学ぶことが出来た。移民問題が深刻化し、右派の政党が勢力を伸ばしてきている現在、今後のEUを見ていく上でも重要な内容であったと思う。

何度かあったグループワークの中で、個人的には環境問題に関心があったため“Sustainable Development as a common challenge for Europe and Asia”でのワークが印象に残っている。各グループ与えられたテーマに関して持続可能な発展のための問題と解決を考えるという時間で、私のグループは「朝食」がテーマだった。「持続可能な発展」というテーマ

はEUには直接関係していないが、地球規模での環境・経済・社会のバランスを考えることは重要なことだと感じた。

“The Strange Thing EU: Institutions and Decision-Making”がテーマの1日は、午前中は講義、午後はワークショップという形で、EUの機関と条約の決定手続きに関して、その複雑さを学んだ。講義では、規則・指令・決定・勧告といったEU法の違いや仕組み、欧州議会・閣僚理事会・欧州委員会などの主要な機関と各機関の関係や役割、及び条約の決定手続きの現在に至るまでの歴史を教わった。前期にEU法の授業で学んだことが役立ち、復習にもなった。午後は、タバコの箱のラベルに関しての条例を制定するという名目で、全員がそれぞれ欧州議会・各国の代表（閣僚）・タバコ推進委員・健康推進員に分かれて実際に決定までの手続きを試みた。私は欧州議会の一員を担当し、タバコのラベル表記に関する条件を他のメンバーと検討した。EU加盟国の市民の代表としての立場で意見を表明するべきであったが、自分たちの観点からの提言となり最初はほとんどの提案が否決され、各国と交渉をするなどした結果2回目では可決された。拡大を続け28カ国になった現在のEUでのあらゆる話し合いや決定手続きがどれほど大変かを、身を以て実感した1日であった。

遠足、各機関への訪問

フランスのメッツ、ドイツのザールブリュッケン、トリーア、ルクセンブルクは初めて訪れる地であった。ストラズブルでは欧州審議会とYouth Center、ルクセンブルクではESM(European Stability Mechanism)を訪問した。昨年から今年にかけてヨーロッパ各地でテロが発生した関係で、安全性を考慮した結果、今年は例年に比べEU関連機関の訪問が少な

かったように感じた。特にベルギーのブリュッセルへの訪問がなかったのは残念である。夏休みの期間ということも重なって、ストラスブールでも欧州議会は外から眺めるだけであり、EUに直接関連する機関はESMのみであった。しかし、これらの機関への訪問は貴重な機会であった。各機関での担当者の方々からのお話は、どれも今までほとんど勉強していなかったことで、それぞれの取り組みや特徴など新たに学ぶことが多かった。欧州審議会、Youth CenterはEUに加盟していないヨーロッパの多くの国も参加しているということもあって、EUよりも規模の大きい組織の存在を学ぶことができた。EUだけではなく、ヨーロッパの各国の繋がりを改めて知ることができ、ヨーロッパを包括的に知るという点でも価値のある訪問であったと感じる。またESMでは、ユーロ危機やギリシャ危機が近年にあったこともあり、具体的なメカニズムを知りイメージすることが出来るようになった。

ザールブリュッケン、トリーア、メッツの遠足は、セミナーハウス近郊のヨーロッパの街を知るという点では行くことが出来て良かったと感じる。日程自体は充実していて楽しかったが、EUに関連する機関の訪問などはなく、本当に遠足という形だった。シェンゲンは小さな区画であったがシェンゲン協定の結ばれている国々の国旗やモニュメントがあり、街自体はルクセンブルクにあるが川を挟んで反対側はドイツ、もう少し進むとフランス、という3国の境界を実感することが出来たのも興味深かった。他のEU関連の訪問は少なかったが、EUを代表する協定の記念的な場所を訪れることができたことはこのプログラムの遠足に参加した意義を感じた。

感想と反省

EUに関しての理解が深まったこと、英語を積極的に使い鍛えられたこと、初めて会う学生との交流のあったことが本プログラムに参加して良かったと感じる点である。EUに関して、様々なアプローチから学ぶことができた。特にワークショップでは、実際の事例や各機関の立場を自分なりに考えたのは初めてで面白い経験であった。各講義の先生方もヨーロッパの異なる国の出身で、専門分野も異なり、所属されている期間なども多様であったためそれぞれのバックグラウンドの違いがお話

の中にも表れており興味深かった。先生方からの講義だけでなく、他の参加者からの質問や発表での振る舞いも印象的で、鋭い指摘や自分とは異なる観点からの意見は、講義の内容をより深め新たな視点を持つことができたと感じる。参加者のバックグラウンドの違いも、ワークショップや質問でも大いに発揮されていた。これまで教科書の上での知識だったEUであったが、今回の講義やワークショップ、遠足での各機関への訪問によって今まで学んだことの総復習にもなり一層関心が高まった。また、ドイツ語で授業を受けたり留学をしたりしたことはあったが英語を使用して長い時間を過ごすということは初めてだったため、その点でも新しい環境で自分を鍛え向上させる良い経験であった。梨花女子大の学生とともに過ごしたのも、学生同士の交流を深めるという点、アジアの問題に関する講義では韓国からの視点での意見を聞くことができたという点で有意義であった。今年は梨花女子大のグループに韓国人の方だけでなくタンザニア、ラトヴィア、コスタリカ、アメリカからの留学生も参加しており、グローバルな視点を取り込まれたことで議論が面白く活発になっていたと思う。

他の参加者の積極的な態度に圧倒されてなかなか発表することができなかったことは悔やまれる点である。またEUに関して前期で既に学んでいたことは多かったが、知識不足を感じる面も多かった。EUが自分の研究テーマと直接関連していないということもあるが、もっと勉強しておけばよりクリティカルな質問をしたり自分の意見を主張したりすることが出来たのではないかと感じる。英語でのディスカッションもなかなかハードで、他の参加者とのグループ作業では自分の役割を作っていくのに苦労した。自分の英語力とEUの知識不足を感じた日々であったが、参加したことでEUについての理解を深めるだけでなく、より興味のある対象になったと感じる。

展望

ESAの今後と、自分の今後に関しての2点から展望を述べたいと思う。まずESAの展望に関しては、今回東大からの参加者は学年や学部が異なる18名で、この11日間様々な場面で共に協力し、楽しむことができたと感じる。ただ学生の志望動機

や所属、研究関心などがあまりにも異なっていたため、本プログラムの開催趣旨がよくわからなくなる時があった。個々人の違いが互いにより刺激となり、結果として多様性を感じるプログラムになったかと思うが、おそらく本プログラムの開催趣旨自体が当初のものからだいぶ変わってきてしまっていると思う。それは開催する機関や欧州研究プログラムの参加者が少ないこと、その他諸所の事情の関係のためであるのは承知であるが、学部生は「英語を話すため」という気持ちが第一であるのに対し、院生は「EUの事を学びたい」というように、参加学生の志望動機がそもそも大きく異なっていた。双方とも、英語を使用してEUの事を学ぶという体験ができたことは大変良かったと思うが、わたしののようなEUのことを学びたいという気持ちで参加する者にとっては講義の内容は少し物足りなく、英語が出来るもの勝ちという環境に違和感を感じたこともあったと思う。ESA自体は大変すばらしい機会であると思うので、今後の方向性にも期待したい。

自分の今後に関しては、今回ESAに参加したことでEUに対する関心が一層高まったので、知識を深め、今後もさらなる勉強を続けていきたいと思う。イギリスのEU離脱をめぐる問題が6月に起こった直後で、世間でも注目が集まっているこの時期に、EUに関するタイムリーな話題やお話を聞けたこと、またその最中にあるEU諸国に滞在することができたことは良い経験であったと思う。EUは進化し続けている途中にありつつも、未来の姿が見えない状況に陥っているということも実感した。今後のEUの動向にも注目していきたい。

IV

ドイツ・ヨーロッパ研究修了証(ZDS-MA)

奨学助成金成果報告書

超域文化科学専攻
表象文化論 修士課程
相馬尚之

はじめに

このたびドイツ・ヨーロッパ研究センターより助成を受け、8月1日から31日にかけてドイツ・オランダで研究調査および語学研修を行った。今回の調査の主要な目的は、19世紀から20世紀初めの西欧において、科学が理論的にも制度的にも大きく発展し規範として確立されていくと同時に、一方では大衆にとって科学が理解不可能な疑わしいものでもあったという、現代にもつながる科学観の成立の経緯を明らかにすることであり、そのために一つには20世紀前半に「ウィーン実験生物学研究所」において論文の捏造疑惑というスキャンダルを引き起こし注目を浴びたパウル・カンメラーに関する資料の収集を行い、もう一つには彼の実験の中心を成したサンショウウオについて、西欧文化の中での位置を明らかにすることとした。

調査は、日本からオオサンショウウオを持ち帰りカレル・チャペックの『山椒魚戦争』にも影響を与えたフィリップ・フランク・フォン・シーボルトの学んだヴュルツブルク大学を拠点とし、またシーボルトハウスがあるなど、彼と縁の深いオランダのライデン市を訪問した。

本報告書では、第一にヴュルツブルク大学における資料調査における成果を報告するとともに語学研修やドイツでの生活について記し、第二にオランダでの滞在について述べる。そしてこれらを踏まえつつ、今回の研究調査や語学研修の意義と今後の方針について報告することとしたい。

1. ドイツ・ヴュルツブルク大学

(1) 資料調査

今回の資料調査では、上述のように

大衆のアンビヴァレントな科学受容を検討するうえでこれまでほとんど注目されてこなかったウィーン実験生物学研究所に関する資料の収集を主目的の一つに据えており、ヴュルツブルク大学図書館においては主にパウル・カンメラーの著作と、関連する二次文献の収集を行った。

ヴュルツブルク大学では、語学研修に参加し大学のパソコンからログイン可能なIDを与えられたこともあり、電子データベースを有効に活用し20世紀初頭の論文の多くにアクセスすることができたのは大きな収穫であった。一方で、事前調査の不足もあり紙媒体の資料については十分な調査ができなかったことは大きな痛手となった。助成の申請を行った5月には関心が絞り込めていなかったこともあり、資料の有無等を事前にきちんと確認することができなかったため、ドイツに滞在するという貴重な機会を十分活用することができなかったことは大いに反省すべき点である。

また、大学が夏休み期間であり通常とは図書館の開館時間等が異なるために混乱させられるということも多々あった。閉館が早いというだけではなく、各学部が保有する附属図書館は夏季休業期間は空いておらず受付で依頼しそれぞれ取り寄せてもらわなければならない他、空いていても附属図書館の受付の担当者が専業ではないためシステムを把握しておらず、行くとたびに書籍の貸し出しについて異なる対応を受けることもあった。夏期休暇を利用することで調査を行ったが、ドイツの大学も休暇中ゆえに、円滑に進まない場合にも幾度か見舞われることとなった。

一方でヴュルツブルク大学図書館には、想定していた以上に資料収集を進めるうえで効率的なこともあった。ドイツの大学図書館にはスキャナーが設置されている場合も多いが、ヴュルツブルク大学図書館においてもかなり精度の高く読み取りも迅速なスキャナーが複数台設置されていた。ヴュルツブルク大学においては書籍のコピーは有料であったが(A4で0.06€, A3で0.12€程度)、スキャンは無料なので、膨大なページをコピーしたとしてもそのままUSBやオンラインストレージ等

ドイツ・ヨーロッパ研究修了証
(ZDS-MA)

ZDS-MAは、ESPIに登録していない修士課程に対して、ドイツに関する研究の支援を行う登録制の教育プログラムです。海外調査奨学助成金の給付には、プログラムへの登録、および修了要件を考慮した履修が求められます。また、毎年度開催される研究報告会での研究成果の報告や修士論文の提出が義務付けられます。詳しくは、センターHPをご確認ください。

に保存し、手元に保持することが可能となっていた。そのため、今回の調査でもカンメラーにとどまらず、人造人間など幅広く自分の関心のある領域についても資料を収集することができた。



ヴュルツブルク大学図書館のスキャナー

このように安価かつ簡便に多くの資料を収集し、手元に残しておくことを可能とする技術が姿を現してきたことは、これから資料調査の方法や態度に影響を与えていくのではないだろうか。

(2) 語学研修

調査に加えて、ヴェルツブルク大学に滞在中、8月2日から26日にかけてサマーコースに参加した。授業の形式は、午前中に教科書を用いてドイツ語の授業を2コマ行い、昼食休憩後に選択制のワークショップを1コマというものであった。

ドイツ語の授業においては、会話や聞き取りの練習も多く、また他の参加者との積極的な議論等が行われるため、普段あまり磨くことのできない能力を鍛えることができた。日本では特に精読が授業の中心となる傾向が強く、言語を実際に運用することに対する意識が高いとは言えない状況が、中高における英語教育も含め外国語教育において問題視されている。現在英語科の専修免状の取得を目指していることもあり、様々な国の学生と外国語教育について意見を交換することができたことは、教育の多様な実践を考えるうえで貴重な機会となった。

午後に行われたワークショップは、“Interkulturelles Training”と“Deutsch für Beruf und Alltag”に参加した。前者ではコミュニケーション理論を参照しつつ、異なる文化的背景を持つ人々の間でどのように誤解や衝突が起き、またそれを解決することができるかについて、参加者のグループワークを通じて検討していった。後者ではドイツに留学あるいは就業する際に必要となる、住居の登録方法や履歴書の書き方等についての講習を受けた。

サマーコースは単に語学を磨くのみならず、多様な地域から参加している学生と交流することも重要な経験となる。今回はウクライナと中国からの参加者が特に多く、それにスペイン・ポルトガルといった南欧、ロシア・アメリカといった国が続いたが、逆にイスラーム圏からの留学生は皆無であった。またドイツ文学のような文系の学問を先行している学生は少数派で、工学や情報科学を修めている学生が多かった。それでも、ポルトガル出身の技師が『源氏物語』や谷崎潤一郎を知っているなど、ヨーロッパのギムナジウムの教育に驚かされる場面もあった。

ドイツは確かに国境を持った一つの国

として存在するが、同時にドイツ語やドイツ文化、そしてドイツ経済は各国で多様な受容をされており、それぞれ異なった感覚のもと眺められている。サマーコースに参加することは、そのような「ドイツ」の広がりを目の当たりにするうえでも、非常に有意義であった。

2. オランダ

8月27日から30日にかけてオランダのロッテルダム、ライデン、アムステルダムに滞在した。主な目的は、シーボルトが日本からサンショウウオを持ち帰り、その後飼育されていたライデンを訪問し、市内にある自然史博物館Naturalis（正式にはナチュラリス生物多様性センターNaturalis Biodiversity Center）とシーボルトハウスを見学することとした。

自然史博物館には多数の動物の標本が展示されており、その中には日本産のオオサンショウウオの標本も確認できた。シーボルトが持ち帰ったサンショウウオの標本も、非公開ではあるが現在も自然史博物館に保存されているという。現在の専門化し細分化した生物学とは異なった博物学の伝統を引き継いだ自然史博物館は、現代科学の系譜を考える上で興味深い地位を占めており、また近年の科学の細分化に対する再考を促すうえでも欠かせないものである。

シーボルトハウスの展示においても博物学的探求の痕跡を見て取ることができた。1823年から28年にかけて日本に滞在したシーボルトは、医師として活動すると同時に、日本国内の万物の採集を試みた。彼の収集したコレクションは日本の魚や植物に始まり、書籍や刀、鎧、人形、仏像、絵画、玩具などあらゆる領域に及ぶ。シーボルトハウスでは、それらが広く展示され、かつての錬金術師の「驚異の部屋」のような姿を見せている。

シーボルトの生きた時代は、すでに近代大学制度がプロイセンのベルリン大学を端緒にドイツへと広がっており、今日へと連なる専門的な科学が創始され、博物学が下火に向かう時代であった。それでもなお異国へと旅立ち万物の収集を目論んだシーボルトを惹きつけた広範な自然への関心は、自然史博物館やシーボルトハウスの展示へと引き継がれており、現在でも専門的な科学とは異なる形で人々を自然の探求へといざなっている。



自然史博物館の植物標本展示

3. 総括

今回の調査では、事前準備の不足により資料収集が一部難航する一方で、スキャナーのために想定していた以上の書籍を入手することもできた。もちろん資料調査においては、複写が禁止されている資料を特別の閲覧室でページを一枚一枚めくことも得難い経験であり、保存庫から出てきた古い文献を手取ることは大きな感動を伴っている。今回も、ヴェルツブルク大学図書館の閲覧室で保存庫の文献を開いたとき、扉にナチス時代のスタンプが押してあった時は大きな衝撃を受けた。このように紙の資料に触れることも極めて大切なことであろう。

だが同時に、開架資料はスキャナーを用いることで手早く複写することが可能であったことも事実である。海外滞在の限られた時間の中で、無料で迅速に資料を複写できることは大きなメリットであり、加えて今後は電子書籍の普及や資料の電子データ化もあり、膨大な情報を容易に入手できるようになることが予想される。日本での導入は著作権等もあり現在のところ進んでいない様子ではあるが、膨大な資料の中で重要なものを識別し読んでいく能力がこれからの研究者にとってますます重要になっていくことをドイツの図書館で肌で感じられたのは得難い体験であった。

今回の調査では、資料の収集と実地調査を通じて西欧に根差す科学の伝統の一端を垣間見たことにより修論に向けて前進するとともに、資料調査の意義や将来についても新たな可能性を体感することができた。これら成果を踏まえつつ修士論文、そしてその先の研究者としてのキャリアについても検討していきたい。

V

博士論文奨学助成金(ZSP)

エルンスト・バルッハを
巡って地域文化研究専攻(グローバル
共生プログラム所属)
博士課程 東家友子

近代中国の著名な文学者である魯迅(1881-1936)は、美術愛好家でもあった。魯迅の美術品・美術書コレクションには多くのドイツ20世紀版画作品や版画集が存在しており、エルンスト・バルッハ(1870-1938)の作品もその中に含まれている。本報告では、バルッハゆかりの地、ギュストローの調査訪問結果を中心に述べる。

1. エルンスト・バルッハ

エルンスト・バルッハは、彫刻家として有名だが、彫刻以外にも版画、戯曲、陶芸など幅広い分野で作品を残している。1870年に北ドイツの街、ヴェーデルで医者の子として誕生したバルッハは、ハンブルク、ドレスデンの学校で美術を学んだあと、パリやロシア、フィレンツェなどでの滞在を通して、自己の表現スタイルを確立していった。1905年から1909年の間はベルリンを拠点として活動していたが、1910年にギュストローへ転居以降は拠点を移えることなく、ギュストローで制作活動に励んだ。

第一次世界大戦開戦当初は戦争を支持していたバルッハであったが、志願兵として戦争を体験した後、戦争への態度も変化した。戦後は反戦的、厭戦的、宗教的な作品を多く制作し始めた。1927年からは大がかりな公共委嘱作品を手掛け始めた。最初に作られた《ギュストロー戦没者記念碑》は、第一次世界大戦中に次男ペーターを失ったケーテ・コルヴィッツ(1867-1945)がモチーフとなっている。他にもハンブルクやリュベックなど、主に北ドイツにある街や教会のために戦没者

記念碑を制作した。

1930年代に入ると、バルッハや彼の作品が「共産主義的」「東方的」などとして、ナチス支持者らによるバルッハへの攻撃が始まった。1933年ヒトラーによる政権掌握後、バルッハの活動に対する圧力は厳しさを増していく。1937年には、ナチスによって開かれた「頹廢美術」展において、バルッハのブロンズ作品《再会》が展示され、その後彼の作品は公共の場から撤去された。失意の中、バルッハは1938年10月にロストックの病院で68歳の生涯を閉じた。

2. バルッハゆかりの地、ギュストロー

ギュストローは人口3万人弱の小さな街だが、中世からの街並みを残し、美しいギュストロー城を有する観光地である。バルッハは1910年、40歳の時にギュストローへ来て以来、68歳で亡くなるまでギュストローで生活し、多くの作品を制作した。ギュストローには、バルッハの作品が飾られているギュストロー大聖堂、礼拝堂やバルッハ・シアター、バルッハ博物館など、バルッハに関する数々の施設が点在している。

数年前、ベルリンのケーテ・コルヴィッツ美術館からバルッハ財団のプロプスト館長を紹介していただいた。魯迅がケーテ・コルヴィッツ本人から作品を直接購入したことは、中国美術史において周知の事実であるが、2007年、《ケーテ・コルヴィッツと魯迅展》が、バルッハ財団において開催されていた。プロプスト館長はその企画を担当し、上海魯迅記念館及び北京魯迅博物館での調査をまとめた論考を展覧会カタログに発表している。プロプスト館長とはメールのやりとりを通して交友を温めてきたが、私のベルリン留学によって、プロプスト館長との対面も可能となった。ベルリンから電車で2時間という距離にあることから、これまで3度ギュストローを訪れたが、毎回プロプスト館長から各施設の案内や私自身の調査に関するサポート、アドバイスをいただき、大変感謝している。

博士論文奨学助成金(ZSP)

ZSPは、社会科学の分野を中心とした、ドイツやドイツに関連する分野の博士論文を作成するための現地調査を支援するプログラムです。調査終了後、通常の査読プロセスを経て『ヨーロッパ研究』に論稿の一部を発表することが義務付けられます。詳しくは、センターHPをご確認ください。

バルッハ財団

バルッハ財団は、東西ドイツ統一後間もない1994年に設立された。財団はギュストローの市街地から少し離れたハイトベルクの森の中にあり、敷地内には企画展やイベントを行う展示館、彼のアトリエを利用した常設展示スペースのアトリエ・ハウスおよびワークショップ・スペースが隣接している。収蔵庫・資料室及びスタッフルームは展示館、会議室及び館長室はアトリエ・ハウスに配置されている。初めて財団を訪れた際には、プロプスト館長から館内ツアーをしていただいた。ベルリンの国立博物館群の規模と比較すると、展示スペース、スタッフ人数などこじんまりしていたが、地下収蔵庫が予想以上に大きく、バルッハ作品が所狭しと置かれているのが印象的だった。展示スペースは緩やかなスロープを用いたバリアフリー構造で、大展示室には北向きの大きなガラス窓から柔らかな光が差し、参観者がゆったりと作品を鑑賞できるような、居心地の良い空間となっていた。

ギュストローへ転居後、しばらくは市街地に住んでいたバルッハだったが、訪問客の対応に時間をとられ作品制作に集中できない、と当時友人のベーマー夫妻が住んでいたハイトベルクへ引っ越したそう。バルッハもかつて森の中を散歩

するのが好きで、散歩しながら思索することが多かった、とプロプスト館長が話してくれた。ただ現在、博物館の集客力を考慮すると、展示館やアトリエ・ハウスは市街地から離れ交通アクセスも不便なため、観光客がなかなか足を延ばしてくれず、特に雨の日は来場者数も落ち込むのが悩みの種でもあるとのことであった。

ギュストロー大聖堂 (Dom)

ギュストロー大聖堂は、ギュストローの市街地に位置し、ギュストローの主要な観光スポットであると同時に、ギュストロー住民の憩いの場でもある。バルラッハ最初の公共委託作品である《ギュストロー戦没者記念碑》はここに飾られている。前述の通り、この記念碑はケーテ・コルヴィッツの面影を宿したブロンズ作品で、《空飛ぶ天使》とも呼ばれている。原作は1937年にナチスによって撤去され、破壊された。1942年、残っていた石膏原型をもとに、第二鑄造が秘かに制作され、終戦後の1952年にケルンの聖アントニウス聖堂に納められた。現在ギュストロー大聖堂に飾られている作品は、ケルンの第二鑄造から鑄型をつくり制作した第三鑄造である。

《空飛ぶ天使》のモデルとされるケーテ・コルヴィッツは、近代ドイツ美術史上最も著名な芸術家の一人である。コルヴィッツは版画作品を多く制作したが、塑像作品も少なからず残している。バルラッハより3歳年上で、二人はバルラッハのベルリン時代に知り合い、バルラッハのギュストローへ転居後も親交を保っていた。バルラッハの死後、ギュストローへ真っ先に弔問に訪れ、デスマスクを制作したのも彼女であった。

私が大聖堂を訪れたのはまもなく閉館という時間で、すでに日が暮れかけていた。薄暗い聖堂に夕日の黄色味がかった光が差す中、堂内の奥に吊るされた《空飛ぶ天使》は、控えめながらも静かな存在感を放っていた。天使の頭部は簡素化されたフォームで、コルヴィッツの顔に酷似している訳ではないが、卵型の顔や、眉と鼻のあたりなど確かにコルヴィッツの面影を思い浮かべることができる。と同時に、どこことなく興福寺仏頭にも似ているようにも見えた。

礼拝堂 (Kapelle)

礼拝堂の歴史は古く、すでに15世紀に

存在していたことが確認されている。旧東ドイツ時代の1953年以降、バルラッハの作品が展示されるようになり、東西ドイツ統一後には礼拝堂も改修され、展示館、アトリエ・ハウスと並びバルラッハ財団の博物館のひとつとなっている。ギュストローの駅に近く、市街地にも近いため、礼拝堂でバルラッハ作品に触れる観光客が多い。

3. バルラッハと魯迅

魯迅とバルラッハは、コルヴィッツのように直接手紙のやりとりがあった訳ではないが、魯迅はバルラッハの版画作品などをドイツから購入しており、それらが今も北京魯迅博物館に収蔵されている。

魯迅が購入したバルラッハ作品・作品集は以下の3点である。
版画連作『神の変容 (Die Wandlungen Gottes)』カッシーラ社、ベルリン、1922年。魯迅は1930年10月19日に入手。
挿画つき戯曲本『拾い子 (Der Findling)』カッシーラ社、ベルリン、1922年。
魯迅は1931年11月に入手。
作品集『エルンスト・バルラッハ：彫塑作品とグラフィック作品の手引

(Ernst Barlach: eine Einführung in sein plastisches und graphisches Werk)』ラインホルト・フォン・ヴァルター編、37点の図版入り。フルヘ美術出版社、ベルリン、1927年。魯迅は1931年11月に入手。

これらの作品・作品集はすべて、当時ドイツに留学していた魯迅の友人、徐詩荃(1909-2000)によって、上海に住む魯迅のもとへ郵送された。徐詩荃は原名徐琥、字李海、晩年の通称は徐梵澄で、湖南省長沙出身である。1929年8月にベルリンへ到着し、4年間の留学生生活を経て1932年に帰国した。フンボルト大学公文書館に、当時のベルリン大学へ入学した徐詩荃の登録カードが残されていた。当時の登録カードは学生本人によって記入されている。登録日の1929年9月30日、出身地などの登録内容、筆跡から徐詩荃の登録カードを割り出し、北京魯迅博物館資料室の夏女史にコピーを届け、確認した。徐詩荃の回想録「星花旧影」(『徐梵澄文集4』、上海三聯書店、2010)によると、徐詩荃は1930年にはハイデルベルク大学で学んでいるが、ベルリン大学公文書館の登録カードによると、3学期間(1929年冬、1930年夏及び1930年冬)在

籍したものと思われる。また、ベルリン大学で徐詩荃が受講した講座は確認できなかった。今後更にフンボルト大学公文書館及びハイデルベルク大学での調査を進めたい。

北京魯迅博物館の夏女史によると、魯迅は自身が購入した本を大事に保管し、原則として本に書き込みをすることはなかったとのことである。ところが、興味深いことに、『神の変容』の第2葉と第7葉に、徐詩荃による解説と詩作が書き込まれている。

残念ながら、この点について魯迅及び徐詩荃が言及した記録はない。また、徐詩荃がドイツ留学中にやりとりした魯迅との書簡は、徐詩荃によれば数十通に上ったが、抗日戦争中に自宅が空襲を受け焼失してしまった。しかし、徐詩荃から魯迅に送られた最初のバルラッハ作品が『神の変容』で、その後魯迅が『エルンスト・バルラッハ作品集』と『拾い子』を入手していることから、徐詩荃がドイツでバルラッハ作品に出会い、魯迅に紹介するために『神の変容』を解説つきで送ったものと考えられる。『神の変容』を目にしてバルラッハに興味を持った魯迅が、徐詩荃にその他のバルラッハ作品の購入を依頼したのではないだろうか。

魯迅が中国国内で推進した創作木版画運動においては、バルラッハ作品の影響は確認されていない。しかし、二人が生きた時代はほぼ重なっており、ともに青春時代の一時期を異国の地で過ごしたことや、東西の宗教・哲学に深い関心を抱き、1900年前後にヨーロッパで広がったアール・ヌーボー(ユージュント・シュティール)を吸収した上で、表現主義的な文学作品、芸術作品を創作したことなど、いくつかの共通点を看取することが出来る。今後、二人の生きた時代の地域的特性、国際性に留意しながら、二人の共通点や相違点を更に検討していきたい。

VI

日独共同大学院プログラム(IGK)

2016年春季・共同セミナー



市民社会と地方自治

日時: 2016年3月9日-3月13日

場所: ハレ大学

使用言語: ドイツ語

3月9日(水)

自己統制あるいは自治—思想史、概念的
的反省と推測

ハラルド・ブルーム(ハレ大学)

3月10日(木)

東アジアにおける社会的紐帯

ペーター・ヴァルケンホルスト(ベルテル
スман財団)

テーマ: 市民運動による都市-田舎関係
の変革

民主主義的公共性の構造転換—市民
社会的な自分たちでまちづくり。ザンク
ト・パウリ地区(ハンブルク)における「カ
イム・ツェレ」を一例として

ハラルド・レムケ(ハンブルク)



ハラルド・レムケ氏の講演

地方の規範と社会的統合—環境問題に
対する美的感覚によるアプローチ

梶谷真司(東京大学)



梶谷真司氏の講演

3月11日(金)

明治期日本における女性協会と女性の
自律組織

ナジャ・キシユカ=ヴェルホイザー(ボン
大学)

フーゴー・グロティウスにおける「ヘブライ
人の共和国」論—国家教会法の別の起
源 [学生報告]

稲垣健太郎(東京大学)

19世紀から20世紀前半のドイツにおける
地方自治

ユルゲン・ロイレッケ(フライブルク)

3月12日(土)

1945年以前の日本における地方自治—
身分制社会の共同体自治から国民国家
的に編成された市民社会における名望
家自治へ

平松英人(東京大学)

西ドイツにおける民主化の理念(1969—
1974)—グスタフ・W・ハイネマンの民主
主義への理解に着目して [学生報告]

大下理世(東京大学)

Das Verhältnis des Westberliner SDS
zum Vietnamkrieg in der zweiten Hälfte
der 1960er Jahre [学生報告]

川崎聡史(東京大学)

ドイツにおける地方自治と市民財政

シュテファン・ブッセ(ハレ大学)



シュテファン・ブッセ氏の講演

3月13日(日)

ヴァッテンベルク市内見学



学生報告(稲垣健太郎)



学生報告(大下理世)



学生報告(川崎聡史)

日独共同大学院プログラム (IGK)

日本とドイツの双方の大学が協力して大学院博士課程の教育研究を共同で行い、プログラムに参加する学生が出身大学において博士号を取得することを支援する日本学術振興会とドイツ研究協会の「日独共同大学院プログラム」(平成19年度)に、東京大学大学院総合文化研究科とマルティン・ルター・ハレ・ヴィッテンベルク大学(ハレ大学・ドイツ)が採択され、2007年9月から2012年8月までの期間、日独共同大学院プログラムは、集中的な学生・教員の相互派遣および大学院博士課程の共同教育を通じて、日独の大学院における組織的な学術の国際交流を促進し、博士課程における若手研究者の養成及び国際的な共同研究の充実を図ってきました。

本プログラムの実績と成果が認められ、2012年9月から2017年8月までの期間、新規プログラムとして、東京大学とハレ大学のプログラムが再び採択されました。新規プログラムでは旧プログラムで確立された共同教育・研究体制を基盤に、これまで以上に国際的な若手研究者養成に力を入れ、国際的な共同研究を推進していきます。

本プログラムの中心的な科目として、毎年、春と秋の年に2回(春にハレ大学、夏か秋に東京大学で)、共同セミナーを開催しています。



春季共同セミナー参加者の集合写真

最新の情報・イベントについては、
ホームページもご覧下さい
<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/>

DESK事務室

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部
9号館3階313号室

Tel/Fax : 03-5454-6112

E-mail: desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp